

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 15 日現在

機関番号：32621

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23320006

研究課題名(和文) 初等・中等教育における哲学教育推進のための理論的・実践的研究

研究課題名(英文) Theoretical and practical investigation for promoting philosophy education in the secondary education

研究代表者

寺田 俊郎 (Terada, Toshiro)

上智大学・文学部・教授

研究者番号：00339574

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 8,500,000円、(間接経費) 2,550,000円

研究成果の概要(和文)：初等・中等教育において哲学教育を推進する方法を研究し、実効的な教育プログラムを構築することを目標として、以下の研究を行い成果を得た。(1)「子どもの哲学」を中心とする哲学対話教育に関する文献を調査し、教育プログラムを構想するための基礎資料を整備した。(2)国内外で行われている哲学対話教育を調査するとともに、研究者・実践者と共同研究することによって、いくつかの教育プログラムを作成した。(3)作成した教育プログラムを、国内のさまざまな初等・中等学校で実際に試行することによって、その有効性を確認し、改良を加えた。(4)初等・中等教育における哲学教育の意義について、理論的・実践的観点から理解を深めた。

研究成果の概要(英文)：In this research project, we have aimed to work out the method of promoting philosophy education in the primary and secondary education and to construct effective teaching programs, accomplishing the following achievements. (1) We have accumulated basic resources for designing teaching programs of philosophy through surveying the literature on the philosophical dialogue in education. (2) We have worked out several teaching programs by referring to existing practices of the philosophical dialogue in schools and making collaborative researches with overseas researchers and practitioners. (3) We have designed several teaching programs and tried them in different primary and secondary schools in Japan, convincing ourselves of the relevance of the philosophical dialogue in education as well as improving our teaching programs. (4) We have deepened our understanding of the significance and meaning of teaching philosophy in the primary and secondary education.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・哲学 倫理学

キーワード：初等・中等教育 哲学教育 子どもの哲学 対話 市民性(シティズンシップ)教育 道徳教育 批判的・創造的思考 国際研究交流

1. 研究開始当初の背景

20世紀の終わりごろから、ユネスコ(1995年パリ会議「哲学にかんする宣言」)に見られるように、哲学教育が高等教育にとどまらずあらゆる段階の教育において重要な役割を果たすという認識が世界的に高まりつつあった。それに呼応して初等・中等教育における哲学教育推進のための研究と実践が世界中で行われるようになった。なかでも M.リップマン、G. マッシュューズらによって開拓された「子どものための哲学(P4C)」から派生した学齢期の子ども対象の哲学教育方法論の研究と実践の展開には目覚ましいものがあった。しかし、日本では、高大連携や高等学校の公民科倫理教育の観点から哲学教育を再検討する動きは見られたものの、哲学教育が社会においてもちうる多様な意義にまで踏み込んだ研究や初等教育における哲学教育の研究については、その重要性に見合った取り組みがなされているとは言えない現状があった。

もっとも、そのような研究は、日本においてまったく行われていなかったわけではない。個々の研究者・研究グループのレベルでは、多彩で先進的な試みが少なからず見られた。しかし、残念ながら、それらの試みは単独で行われ、比較的小規模な研究・実践に留まり、学界にも社会にも認知されにくいのが現状であった。そうした多彩な試みの間の連携・協力体制を築いて研究・実践を展開することによって、初等・中等教育における哲学教育の多様な意義を明確化し、それを推進するための実効性のある具体的な教育プログラムを提示することが課題であるように思われた。

2. 研究の目的

以上のような現状を踏まえ、すでに多彩に試みられている初等・中等教育における哲学教育の試みをつないで連携・協力体制を築き、初等・中等教育における哲学教育の多様な意義を明確化し、それを推進するための実効性のある具体的教育プログラムを提示していくことを目的とした。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するため、次の研究方法をとった。

(1) 研究文献の収集とサーベイ：哲学教育の意義と方法にかんする最新の研究文献・教材を収集しサーヴェイし、基礎資料を整備する。

(2) 国内外の哲学教育の実践の調査・研究：初等・中等教育において実践されている国内外の哲学教育を観察し、実践者に聞き取り調査を行い、分析して共同討議の資料とする。すでに哲学教育を実施している学校から始め、漸次調査対象を増やしていく。

(3) 共同討議：年に2~3回の共同討議の場を設け、分担研究・調査の成果の共有を図る

と同時に、徹底的な討議を通じて哲学教育の意義と方法にかんする共通理解を形成するよう努める。討議の場は原則として公開とし、適宜研究者・実践者を招いてワークショップを開催する。

(4) 海外の研究者・実践者との共同研究：初等・中等教育における哲学教育にかんする国際学会に参加し意見交換をするとともに、研究者・実践者を招いて資料の提供を受け、共同討議、ワークショップを行う。

(5) 具体的教育プログラムの作成と練成：具体的教育プログラムを試作し、それを学校現場の協力を得つつ試行することによって改善し、実効的なプログラムを作成する。

(6) 本研究組織のウェブ・ページの開設・運営：研究成果を公表し、研究者および実践者のネットワークを構築するためにウェブ・ページを開設・運営する。

4. 研究成果

(1) 子どもの哲学関係の文献および教材を中心に資料収集・サーベイを行い、初等・中等教育における哲学教育の理論的基盤にかんする考察のための資料を整備するとともに、教育の具体的な手法にかんする知見、学校現場で直接使える教材および教材開発のための手がかりを得た。また、M. Lipman: Thinking in Education などの基本文献のいくつかを翻訳し、本研究内部だけでなく広く研究者・実践者に活用されうる基礎資料を整備した。

(2) すでに哲学の授業を実施している国内の小学校、中学校・高等学校および海外の初等・中等教育機関(韓国、USA ハワイ州、シンガポール、オーストラリア、ブラジル、ドイツ)を調査し、またそれに携わる研究者・実践者を招聘し共同研究を行うことによって、授業の具体的な手法・教材にかんする知見を得るとともに、国内の初等・中等学校において哲学教育を実施するさいに配慮すべき事柄について知見を得た。また、初等・中等教育における哲学教育の意義にかんする理解を深めた。

(3) 本研究専用のウェブページを開設して本研究の目的と計画とを周知するとともに、共同研究会の報告、調査・研究の報告、実施授業の教材を公開して、研究者・実践者の間の連携・協力体制を広げた。また、哲学教育の具体的方法を検討するためのメーリングリストを開設し、国内の実践者と資料を共有・蓄積することに努めた。また、アジア・太平洋地域の哲学教育ネットワーク(PCYNAP)に加入して、海外の実践者・研究者と連携する態勢を整えた。

(4) 以上の成果に基づいて、いくつかの教育プログラムを作成した(下記の〔図書〕参照)。それらはいずれも講義ではなく対話を主体とする「探求の共同体」の手法を採用している。いずれのプログラムも、授業の環境づくり、授業の進行方法、教材、教員の役割、

授業の評価などにかんする具体的・実践的なプランを含む。それらのプログラムを用いて、国内の小学校、中学校・高等学校で実験授業を行い、それらのプログラムが実施可能なものであること、つまり「哲学のような抽象的思考は小・中学生には不可能である」という通説が誤りであり、子どもたちが哲学対話に参加し、それを楽しむことができることを確認するとともに、運用上の実際的な問題点を明らかにし、プログラムの改善を重ねた。その結果、人数の多いクラスでの運用の工夫、対話形式の授業に慣れていない子どもたちの参加を促す工夫など、実際的な手法を含むプログラムに仕上げることができた。

(5)初等・中等教育における哲学教育の意義にかんする見解の概略は、次の通りである（下記の〔雑誌論文、 、 、 〕〔図書、 〕参照）。哲学の方法は対話しかないがゆえに、自分で考え（自律的思考）かつ他の人と共に考える（共同的思考）ことを促し、当たり前とされていることを問い直すかゆえに、自他の意見の前提や自己の生や社会の基盤を問い直し（批判的思考）よりよい答えへと修正していく（創造的思考）ことに促す。あるいは、理由・根拠・前提を問うがゆえに、自他の考え方に対する「理」解を促し、意味・価値・文脈を問うがゆえに、事柄をより広いコンテキストのなかに位置づけて考えることを促す。また、重要だが簡単に答えの出ない問いを問うがゆえに、答えの出ない問いを保持し続け（宙ぶり状態に耐え）思考を粘り強く遂行することを促す。このような哲学対話の特色からは次のことが帰結する。（比較的）平等で自由な空間を開き、事柄を自己の生や生活世界に結びつけて考える（生活統合）ことを促す。以上のような哲学対話の教育は、さらに、次のような成果をもたらす。

学力の基礎の涵養：共同的探究の作法と技法を習得すること、言い換えれば「学校知」と「生活知」の乖離を埋めること、および自律的・共同的思考の作法と技法を習得すること。

市民性の涵養：民主的意思決定の基礎としての熟議の技法と作法、哲学的探求と政治的決定の兼ね合いを理解すること、言い換えれば、市民社会（コミュニケーションをメディアとする生活世界）と政治社会（権力をメディアとする政治世界）の言論の違いを理解し、価値観の多様化、科学技術の発達、グローバル化のもたらす新たな問題に対処する市民の技法（「再帰的近代」を生きる「再帰的主体」の技法）を習得すること。

道徳性の涵養：哲学対話が開く（比較的）自由で平等な対話空間は、相互人格的な態度、つまり自他の考え方・感じ方の違いを認めつつ自由で平等な人（人格）どうしとして聴きあい・話しあうことを促す。また、批判的思考・文脈的思考（生活統合）によって、基本的な道徳的規範の意味を明確化すること、言

い換えれば、道徳的理由、善悪・正邪の意味の探求を通じて道徳的規範の意味が明確化すること。また、これまでの道徳的規範をそのままではめて考えることのできない、現代社会が直面する（生命倫理の問題を典型とする）新しい道徳的問題を解決する技法と作法を習得すること。以上～は哲学教育の最も基本的な意義であるが、それは、言いかえれば、世界市民として生きるための基礎的教養の涵養である。

以上の基本的な意義に加え、さらに発展的な意義も見出された（下記の〔雑誌論文、 〕参照）。一つは、各教科教育における哲学教育の可能性である。哲学教育は独立した教科としてだけでなく、他の教科とともに、あるいは他の教科のなかで行われることによっていっそう効果を発揮する。もう一つは、環境教育や持続可能な発展のための教育（ESD）における可能性である。これは、上記、 の点にも関連する。さらに一つは、被災地の子どもたちなど特定の困難な状況に直面する子どもたちが、自己をケアするための助力として、哲学対話が活用される可能性である。

(6)対話を主体とする哲学教育は哲学史を主体とする伝統的な哲学教育と矛盾するものではなく、むしろ両者は相補的に活用されるものであることが明らかになった（下記の〔図書、 〕参照）。対話を通じて自ら哲学的な問いを問い・考える経験を通じてはじめて、哲学史上のさまざまな理論や論争の意味が理解され、また、過去のさまざまな哲学的理論や論争に触れることによって、哲学的な対話・思考が誘発される。このことは高等学校の公民科倫理教育のあり方を考えるうえで留意されるべきである。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計15件）

本間直樹、高橋綾、震災について対話する 子どもの哲学の可能性、Communication Design、査読有、9巻、2013年、21-41

河野哲也、コスモポリタン教育に向けて、教育哲学研究、査読有、108巻、2013年、41-55

河野哲也、Philosophy Education in Japanese Primary and Secondary School after Tsunami and Fukushima、Proceedings of the 11th International Conference on Philosophical Practice and the 4th International Conference on Humanities Therapy、査読有、1巻、2012年、369-385

森秀樹、「子どものための哲学」による「市民性教育」の内容と方法-グローバル化時代の市民性教育としての「子どものため

の哲学」(5)、兵庫教育大学研究紀要、無査読、40巻、2012年、63-78

豊田光世、「子どもの哲学」の教育活動の理念と手法に関する研究 ハワイ州の取り組みを事例として、兵庫県立大学環境人間学部研究報告、査読有、14巻、2012年、41-50

山田圭一、日本の初等中等教育における哲学教育の可能性と現代的意義、第3回日中哲学フォーラム論文集、無査読、2011年、310-317

森秀樹、「市民性教育」の模索とその諸課題-グローバル化時代の市民性教育としての「子どものための哲学」(4)、兵庫教育大学研究紀要、無査読、39巻、2011年、109-120

豊田光世、高橋綾、Philosophy for Children in Japan, 2011 International Conference of Philosophical Inquiry with Children, 2011年7月18日、Gyeongsang National University

〔学会発表〕(計35件)

寺田俊郎、共同の哲学的探究としての倫理学、日本倫理学会、2013年10月6日、愛媛大学

河野哲也、Ethics in the classroom: The re-examination of the concept of autonomy, 3rd International Association for the Scientific Study of Intellectual and Developmental Disabilities, 2013年8月22日、早稲田大学

河野哲也、Moral education in Japanese primary and secondary schools and the Challenge of P4C, The International Council of Philosophical Inquiry with Children (ICPIC), 2013年8月13日、University of Cape Town

本間直樹、高橋綾、哲学対話とセルフケア 震災後の生活や社会についての中高生の対話リレーから、アートミーツケア学会、2012年12月16日、愛媛大学

河野哲也、実践としての哲学と子ども、日本教育哲学会、2012年9月17日、早稲田大学

森秀樹、教員養成系大学における「哲学教育」、日本哲学会、2012年5月11日、大阪大学

河野哲也、土屋陽介、村瀬智之、小中学校での哲学対話教育の成果、日本哲学会、2012年5月11日、大阪大学

〔図書〕(計5件)

河野哲也、「こども哲学」で対話力と思考力を育てる、河出書房新社、2013年、219

直江清隆、越智貢、岩波書店、高校倫理からの哲学、第1巻、2012年、208

直江清隆、越智貢、岩波書店、高校倫理からの哲学、第2巻、2012年、224

中岡成文、大阪大学出版会、試練と成熟 自己変容の哲学、2012年、215

寺田俊郎、石川求、晃洋書房、世界市民の哲学、2012年、186

〔産業財産権〕該当なし
出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ：
<http://pweb.cc.sophia.ac.jp/tterada/philed/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

寺田 俊郎 (TERADA, Toshiro)
上智大学・文学部・教授
研究者番号：00339574

(2) 研究分担者

中岡 成文 (NAKAOKA, Narifumi)
大阪大学・文学研究科・教授
研究者番号：00137358

森 秀樹 (MORI, Hideki)
兵庫教育大学・学校教育研究科・教授
研究者番号：00274027

豊田 光世 (TOYODA, Mitsuyo)
兵庫県立大学・環境人間学部・講師
研究者番号：00569650

直江 清隆 (NAOE, Kiyotaka)
東北大学・文学研究科・教授
研究者番号：30312169

山田 圭一 (YAMADA, Keiichi)
千葉大学・文学部・准教授
研究者番号：30535828

河野 哲也 (KONO, Tetsuya)
立教大学・文学部・教授
研究者番号：60384715

本間 直樹 (HOMMA, Naoki)
大阪大学・コミュニケーション デザイン・センター・准教授
研究者番号：90303990

村瀬 智之 (MURASE, Tomoyuki)
東京工業高等専門学校・一般教育科・講師
研究者番号：00706468

(3)連携研究者
該当なし